

1 渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。銀を持たない者も来るがよい。穀物を求めて、食べよ。来て、銀を払うことなく穀物を求め、価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。2 なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い、飢えを満たさぬもののために労するのか。わたしに聞き従えば、良いものを食べることができる。あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。3 耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。聞き従って、魂に命を得よ。わたしはあなたたちととこしえの契約を結ぶ。ダビデに約束した真実の慈しみのゆえに。4 見よ、かつてわたしは彼を立てて諸国民への証人とし、諸国民の指導者、統治者とした。5 今、あなたは知らなかった国に呼びかける。あなたを知らなかった国は、あなたのもとに馳せ参じるであろう。あなたの神である主、あなたに輝きを与えられる、イスラエルの聖なる神のゆえに。6 主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに。7 神に逆らう者はその道を離れ、悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。わたしたちの神に立ち帰るならば、豊かに赦してくださる。8 わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なると、主は言われる。9 天が地を高く超えているように、わたしの道は、あなたたちの道を、わたしの思いは、あなたたちの思いを、高く超えている。10 雨も雪も、ひとたび天から降れば、むなしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与える。11 そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。

今日の聖書の言葉の中で、特に印象的なところとして聞かれたところはあるでしょうか。私のことで言わせてもらいますと、8節、9節のところがとても心に残りました。

「わたしの思いは、あなたたちの思いとは異なり、わたしの道は、あなたたちの道とは異なると、主は言われる。」という言葉ですが、私たちの思いや計画を遙かに超えて、神さまの思いがあり、神さまのご計画がそれぞれの人の人生にあるのだということですね。

私自身のことを挙げてみますと、若い頃に、まさか自分がキリスト教の教会の牧師になるとは思ってもいませんでした。親が教会に行っていたわけでもなく、キリスト教主義の大学には行っていましたが、そこでも礼拝に出たことは1回もありませんでした。そのような自分が、どういうわけか洗礼を受けてキリスト教の信仰者となり、そして、その後牧師となりました。

大学生の頃は、どこかに就職できてそれなりに生活に困ることなく生きてゆければ、それで良いなと思っていました。それに加えて、少しでも興味を持てる、やりたいと思える仕事ができれば良いと考えていました。最低限、飢えることなく、渇くことなく生きて行ければそれが何よりだと考えたわけです。

この、食べるものや飲むものがなくならい最低限の生活をしていたいという思いは、ほとんどの人に当てはまることなのではないでしょうか。ところが、思うように行かないのが私たちの人生です。その当たり前のように考えていた人生の計画が、狂い始めてしまうこともやはり起こりえるわけです。

人間にとって、一番ないと困るのは水ということになると思いますが、支払いができなくなって水道が止められるのは、どれくらいの期間かご存じでしょうか。これが、電気とガスだと50日くらいだということです。水道は、その倍ぐらいで3～5ヶ月ぐらいです。中にはガスや電気だけでなく、水道まで止められたということを経験された方もいるかもしれませんね。自分でなくとも、知り合いにそういう方がいるがいるかもしれません。命

を保つための一番重要な水がないという状況は、すなわち他のすべてのことに足りないわけで、その状況は本当に大変苦しいことだと思います。そうすると、すべてのことで貧しくなり、飢えと渇きに命が脅かされて生きざるを得なくなります。

本日の聖書箇所2節の途中から、こう言われています。これは預言者イザヤが神さまの言葉を引用したものです。「わたしに聴き従えば、良いものを食べることができる。」

良いものというのは、おいしいものとか贅沢なものということではなく、本当に体にとって栄養となる食べ物のことです。神の言葉、聖書の言葉というのは、のどを潤す水に加えて、健やかな体を作り出す栄養価の高い食べ物を得ることの出来る道に、導くのだということですね。そして、こう続きます。「あなたたちの魂は、その豊かさを楽しむであろう。」と。この場合の魂というのはすなわち心のことですね。ですからつまり、神の言葉が導いてくれるのは体の健康を保つことに加えて、心の飢えや渇きを満たすことも出来るのだということです。この私たち人間のすべてを、心も体も全部まとめて豊かにしてくれるのが聖書なんだというところが、とても大切です。たとえどのような状況に置かれたとしても、その中で何かしら少しでも楽しむことができるようにしてくれる力が、神の言葉にはあるのですね。

生活の貧しさも、心が渇ききって空しくなることも、そのような状態では楽しむということはなかなかできることではないと思います。まさか、自分がこんな苦しい人生を送るようになるとは思ってもみなかったと、嘆いたり、後悔したりするような時には、とても前向きになることはできないでしょう。ただですね、そういう悲しみの多い今までの人生であっても、そんなに捨てたものではないと言えると思います。聖書の言葉の中に、こういう言葉があります。「人々が価値がないといって捨てた石が、新しい建物を建てるための親石、基礎の石になった」といった内容のもので（マルコ12章10節）。つまり、神の言葉というのは、どんなに条件が悪く投げ出したくなるような人の人生であっても、ちゃんと建て直して楽しむことのできるどころまで、変える力があのだということです。

クリスマスに生まれたイエス・キリストを、生ける「神の言葉」そのものと表現することがあります。これを言っているのは新約聖書のヨハネの福音書ですが（1章14節）、そのようなイエスさまがおっしゃった言葉の中に次のようなものがあります。「渇いている人はだれでもわたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる人は、その人の内から「生きた水」が川となって流れ出すようになる」と（ヨハネ福音書7章37-38節）。そして、このことの実例として、サマリアという地域に住んでいた一人の女性のことがあげられています（ヨハネ福音書4章1-42節）。イエスさまは、ちょうど暑いさなかの正午に井戸のところで彼女と出会いました。イエスさまは、彼女に対してこう言います。「井戸の水は、飲んでもまたすぐに渇いてしまう。しかし、わたしが与える水を飲むものは、決して渇くことがない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出てくる」と。

この女性は、イエスさまに出会うまでに5人の夫がいました。ということは、みんな死んでしまったということは考えにくいので、彼女は何かしらの問題を抱えていて男性と離別を繰り返していたのだと考えられます。そして、イエスさまと出会ったのは、暑い盛りの正午でした。大抵、水くみは朝の涼しい内にすまします。ですので、暑い盛りの正午に水くみに来ているというのは、町の人と誰にも会いたくなかったからだと考えられます。彼女は離婚をくり返して来た自分の人生が恥ずかしくて、馬鹿にされた目で見られることを恐れて人目を避けていたのだと考えられるわけです。

生活の苦しさもさることながら、町の中で隠れるようにしか生きられないこの女性は、本当にいろいろな意味

で貧しさの中に置かれていました。ただ、そんな貧しさの中でも悪いことばかりだったわけでもないですね。何よりそんな貧しさの中にいたからこそ、生ける神の言葉であるイエス・キリストと出会ったのです。もし、井戸の水で満足していたのであれば、イエスさまから声をかけられていても、適当に聞き流していたかもしれません。第一人と会うのに後ろめたさがなかったのなら、とうに朝の内に井戸に来ていたので、イエスさまとは会うことさえなかったのです。

人生でのつまずきや挫折というのは、最初はできるだけない方が良くと思いますし、なるべく失敗しない人生の計画をみんな立てると思います。しかし、どれだけの人が自分が思い描いた通りの道を歩むことができたのでしょうか。私たちの思い通りに進んでいった道が、そうでなかった道よりもずっと優れているとは、限りませんよね。最初の道から大きく外れてすっかり迷ってしまったと思える道の方で、私たちにとって本当に価値あるものと出会うということが起こりえるわけです。貧しくて、飢えたり渴いたり、苦しんだからこそ見えてくる世界もやっぱりあると思います。特に聖書の言葉というのは、元気でうまくいっているときよりも、飢えている時、渴いている時の方が心にしみ入ることが多いし、そしてその内容がよく理解出来るということがあると思います。そのような時は、神が私たちに敷かれた道は私たちの思いを遙かに超えていたけれども、やっぱり、これで良かったんだと受け取れるのだと思います。

今日の聖書箇所最後のところこうあります(10～11節)。「雨も雪も、ひとたび天から降れば、空しく天にもどることはない」と。雨も雪も、空から降り注ぐ水であります。その天からの水は、意味なく、何の役にも立たずに、天に帰って行くことはないのだと言っているのですね。天から注がれる水は、大地を潤し、植物の芽を出させて生い茂らせます。そして、人々に種を与え、食べるための糧をもたらしてくれます。それと同じように、私たちがそれぞれ歩んできた道の中で経験したことのどれであっても、決して無駄になったものはないのですね。つらい思いをしたことも、できればあのときに戻ってもう一度やり直したいと思うようなことであっても、それも神さまの敷かれた道の中で起こったことです。どれ一つ、意味のないものはないのですね。

特に、他の人との関わりということを考えて時、私たちが貧しくされた経験というのは生きて来ます。イエスさまは先ほど例に挙げたサマリアの女性との会話の中で、このように言っていましたね。「わたしが与える水は、その人の内で泉となる。その水は人を永遠の命に至らせることが出来る」のだと。この永遠の命に至らせる水は、つきることなく渾々とその女性からあふれ出して行きますが、彼女自身を潤すだけでなく、彼女と接触するすべての人に向かって流れ出して行くのです。渴いている人がそこにいれば、彼女を通してイエス・キリストは命の水となって注がれます。その水の流れは彼女の経験した悲しみの分だけ大きな流れとなって、川となります。たくさん悲しんでたくさん涙を流した人ほど、多くの人の命を潤すことのできる生きた水の通り道になれるのですね。

恵まれた道を歩んで来た人が元気でいつも楽しく生きていても、だれもなんとも思わないと思います。当たり前だと思うだけです。その代わりに、うまく行かないことの方がよっぽど多かったという人が、その自分の道を受け入れてその中でもし楽しむことができているならば、そっちの方が人々を驚かせて、そして生きる勇気を与えることができるのだと思います。

「あの人が方がよっぽど大変なのに、自分が悩んでいることは実に小さなことだった。どうしてこんなにつらいことが多いのに、前を向いてまた立ち上がることができるのだろうか」と、人々の心を揺さぶるのですね。イエスさまと出会って変えられたこのサマリアの女性もそうでした。それまで人目を避けて隠れるように生きて人間が、変えられました。彼女は井戸のところに水瓶を置いたまま、町の中に堂々と入って行き人々に自分に起こったことを話し始めました。すると、みんなびっくりしたんですね。日陰者だったこの女性を、こんな風に変

えてしまう人物とは、いったいどんな人なのだろうか。こぞって町の人はいエスさまのところに行き、神の言葉に耳を澄ますようになったのですが、この町の大きな転換点を生み出したのは彼女の貧しさであり、渴いたそれまでの人生でありました。そして、町の人々は、今度は自分自身の判断で、イエスさまの言葉を永遠の命に至らせる水なのだと認めるようになったのです。こうなると、やっぱり神さまはこういう計画を彼女の道に立てていたのだと思わざるをえないと思います。

思い通りにならなくて、何の意味も見いだせなくなったと自分の人生をあきらめる前に、もう一度聖書の言葉を読み返したいですね。そうしたら、そのような貧しく渴いた人生の方がよっぽど人々の役に立つし、神さまのご計画にとってなくてはならないものだと気がつくと思います。

心から満たされて、心から日々を楽しんでいる人というのは、そんなにいないですよ。誰でも何かしらの生活の大変さやむなしさを抱えているのだと思います。そうだとしたら、私たちが経験する悲しい出来事は、きっと多くの人々を慰めることのできる貴重な源泉、生きた水の泉とすることができると思います。

神の言葉が、イエス・キリストが、私たちの心も体もすべてを満たしてくださり、そして、多くの人々の心を慰め、その苦悩から救い出してくださいませようにお祈りいたします。